



大阪生まれ。98年大阪トリエンナーレ彫刻98でデュッセルドルフ市特別賞受賞、99年よりドイツで制作活動。同市の芸術アカデミー等文化機関と関わりながら、ドイツとの交流を深めている。05年から1年間文化庁の文化交流使としてオーストリアに滞在し、ウィーン市郊外のオッター・ワークナー精神病院—ユージェントシュテール・テアターで個展を開催。コムンズフェスタ2002では田尻麻里子さんとの「By Your Side」展にてインスタレーション作品を発表。

# 人間とは何か。 根元的なものにふれる アートの世界

生きる自信を育んだ沖縄生活

社会の現状を見据え、世に問いかける造形作家・井上廣子さん。世界各地で活躍され、近年は精神病院や強制収容所の内部と窓を撮影した写真のインスタレーションに取り組みられています。隔離された人たちに想いをはせ、人間の深淵に迫り、カタチに結実されるという制作に到るまでの道のりとこれからについてうかがいました。

幼い頃から好奇心旺盛でスカートのまま木登りしたり、消灯後に押し入れで懐中電灯のもと本を読んでは空想にふけるような読書好きな子どもでした。大きくなったらモノをつくる人かモノを書く人になりたいと思っていました。きっと読書好きに加え、親戚にも美術大学卒業生がいたこと、両親が展覧会に連れて行ってくれたり、絵画教室に通わせくれた影響かもしれません。そんな美

造形作家 井上廣子さん

1999年デュッセルドルフの市長と



術好きの両親でしたが、希望していた東京の美術大学の進学は「美術で生きていくのは並大抵ではない」と反対されました。結局、普通の大学に通うのですが、ひたすら「描きたい」という思いを募らせていました。

卒業後、文化人類学者の川喜田二郎ゼミの学生に誘われ、沖縄のフィールドワークに行きました。みんなは2〜3週間で帰りましたが、私は「帰れない」と親に手紙を送り、リュックに寝袋を背負ったジーンズ姿で与那国などをまわりました。あるおばあちゃん宅に住まわせてもらいながら、琉球藍の藍染工房で手伝いをし、手機で布を織って2年間過ごしました。人によって使う色も作り方も異なる昔からの女性の仕事です。それらを調査してまとめたレポートの原稿料と、おばあちゃんや大工さんの手伝いでいただくお金で生活しました。この生まれ初めて自立生活は、「なんとか生きていける」自信がついた2年間であり、現在の私を支える力となりました。

## 人間の深淵を問うアート

関西に戻り、織物の工房に入った後、テキスタイル作家としての仕事は順調でした。自分はこれでいくのかと思ったださな、人生の転換となったのが、95年の阪神淡路大震

そんな中、私を「暗くて重い作品をつくる作家」と言う美術館長がいて、そう見なす美術の世界ならあえている必要はないと思うようになりました。ドイツでは常に美術館から出品依頼があります。社会の状況を読み時代の変化をとらえるアーティストであり続けたいと願っています。作品はコレクターのためだけ

のものではないはず。今ではアートの専門用語ではなく、ふつうの言葉で語れるアーティストになりたいし、アートを勉強してきた人以外の人にこそもっと関わりたいたいと思っています。

## つなかりに気づき世界の扉を開く

ふり返ればそう願うのも、18歳の頃、ロマン・ロランの『魅せられた魂』など生きることに問題を提起した本を手当たりしだい読んだこと、そして機について調べるなかで、百姓仕事を終え、みなが寝静まった後に織る重労働をしてき

災です。震災4日後に西宮・仁川の親族を訪ね、その後も他の親族のいる芦屋や豊中をまわりました。その道中の倒壊した高速道路、木造家屋など見慣れた風景の変わり様がとても怖かったです。被災した親戚にとって、最も必要なのは水や電気などのライフラインでした。ではアートはどうか。アートは必要どころか凶器にしかならぬ品が災害で倒壊すると人の命を奪うものになりますから。その当時制作していたのは、県庁やホテルのエントランスを飾る大型のタペストリーでした。それらがはたして必要なのだろうか。もつと違うものを目指さないといけないのではないかと悩みました。いつまでもあの震災光景が頭から離れず、大人の私がそうなのだから、子どもはいっそう強く感じているはずだと気付き、それ以来、心の問題をテーマにした作品づくりに取り組みます。とりあえずカメラを持ち、精神病院をまわり始めました。徐々に自分も元気になり、社会的な日本の問題に関心が向きかけた頃、神戸の酒鬼薔薇事件の犯人が少年Aだとわかりショックを受けました。一体、人間って何なのか。人間の狂気、正気、境界など、いろんなものが私の心の中に入ってきて混沌としていました。心の目で何かを捉えられないか、と考えて写真を撮りました。

た女性の生き方を考えたことなどがつながっています。そんな幼い頃の膨大な読書体験、2年間の沖縄生活に加えて、自分の「気質」も現在の作品づくりに向かわせていると思います。自分が充足できないものはやりたくないですし、私にとってアートとは、自分が一番元気になるもの、ビッドなものです。ことばは翻訳が必要ですが、カタチの表現はそれと必要としません。アーティストはたくさんいますが、政治的、社会的なものやその背後で悲しんでいるような人をどこかできちんと思っ、共に生きているということを考えて生きていきたい。そのように作品を作り続けたいです。

ドイツなどの強制収容所を巡ると私は恵まれていると思います。戦争のない時代に生まれ、今生かされている。歴史の膨大な犠牲の上に現在があるのです。若い人たちに思われた場所に立っているということをぜひ見つけてほしい。エネルギーなどの富は、貧しい国の人々の生活の土台の上に成り立っています。どんなシステムの中で自分が生きているかについて考えれば、もつと住みやすい世界になるのではないのでしょうか。出会いを求めて「外に出て行きなさい」と伝えたいし、私もこれからはもつとそうしていろんな人に出会っていききたいです。

10/1

【トークと演劇】

Sun

第45回寺子屋トーク

看取り文化の新しいデザイン

「コモンズフェスタ」の皮切りとなった10月1日、本堂ホールにベッド2台を持ち込み、演劇のなかに講演会を織り交ぜた斬新な様式で看取りについて接近。メインゲストは作家で元看護師の小林光代さん。関西エンゼルメイク研究会との共催ということも反映して、看護師等を中心に97名が参加。の演劇と看取りに関する「公演と講演」による協創の場に。



自主企画事業

10/3

【映画とトーク】

Tue

應典院コミュニティシネマシリーズ Vol.7

暴力からのトランスフォーメーション(変容)

米国の終身刑受刑者に焦点を充てた映画「ライファーズ」の上映と坂上香監督と、DVの加害者に対する非暴力ワークショップに取り組んでいる中村正さんのトーク。参加は一般70名、当事者・NPO割引は6名で、会場からの発言を求めたところ、多くの「暴力被害者」の方々が自らの立場をカミングアウトして語り出すという、お寺の力を感じる機会に。



自主企画事業



Comons Festa 2006

参加企画大全集

「場へのまなざし。ここから、世界と他者を見つめる。」と題して、1ヶ月にわたり開催された2006年のコモンズフェスタ。2年間の休会を経て再会された怒濤の1ヶ月、その意味は何だったのか？企画ごと、日付順にその内容を追いかけてみます。スタッフ座談会やコモンズフェスタに寄せるコメントをお読みいただく際に参考にさせていただきます。

【事業形態】

今回のコモンズフェスタの参加事業は3つの枠組みからなります。

- ① 特別参加事業・大阪市・財団法人大阪都市協会による現代芸術創造事業
- ② 一般参加事業・應典院寺町倶楽部共催による参加団体の主催事業
- ③ 自主企画事業・應典院寺町倶楽部による主催事業

10/1~31

【エキシビジョン】

31 days

岩淵拓郎 展

言葉のある風景：應典院

ふとした場所に添えられたことばがアートの世界への扉。1ヶ月にわたって展示したことによって、2度、3度と足を運ぶ鑑賞者も。結果としてのべ1500人程度が鑑賞。会期中実施したトークは作家の世界観と作品への理解を深める絶好の場に。何気なくアートに出会う機会の創出、長期展示の意義、アウトリーチの手段としてのトークの展開など、実施の意義は語り尽くせない。



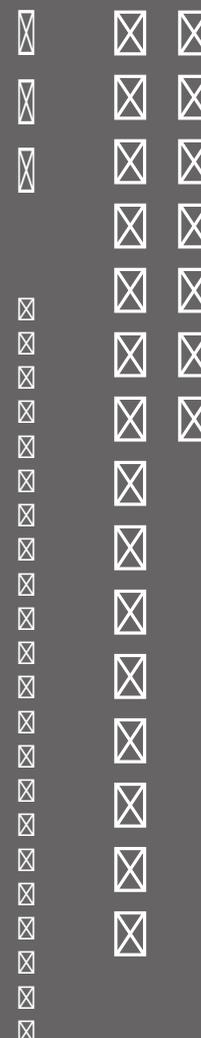
特別参加事業



岩淵拓郎「a piece of meaning」

2007年、應典院は再建10周年を迎えます。かつてお寺は劇場であった、という観点から地域社会における演劇の創造空間として「演劇の應典院」とも呼ばれるように取り組みを重ねてくるなかで、もう一つの柱はアートとNPOの共鳴でした。アートもNPOも、それぞれの思いをカタチにするという活動であるがゆえに、共通の接点が見出させるのではないかと…。そうした思いから、両者が出会う場を多様に創造してきたのが應典院の10年です。

また、1997年以来、多くの「場」を発信してきた異貌の寺・應典院での実践を踏まえて、再建9年目には活動の場を築港にある「piaNPO」にも広げることとなりました。築港ARCの愛称が付けられた「アトリソースセンター by Outenin」は、人と情報と活動の交差点となることを狙いに、大阪市・財団法人大阪都市協会の現代芸術創造事業として展開されています。應典院によって連日生み出される、大小数々の「場」が育てる人、地域、社会とはどのようなものか、見つめてみます。



特集「アートとNPO」

p.5-9.....コモンズフェスタ 2006 イベント大全集  
 p.10-13.....コモンズフェスタスタッフ座談会  
 p.14-15.....コモンズフェスタ 2006 に寄せて  
 p.16-17.....應典院おなじみ劇団紹介  
 p.18-22.....築港 ARC の展望  
 p.23.....築港 ARC スタッフ紹介

10/20

Fri

[ワークショップ]

タイ舞踊のルーツへ

カラダを感じる南タイ舞踊講座

企画者の岩澤孝子さんとスパット・ナークセンさんに加え、同時期に来日中の他6名の教員、学生たちがワークショップの講師に。20名に対して8名の講師という贅沢な場に。タイ舞踊経験のある日本人参加者が半数を占めたものの、同じタイ舞踊でも南タイの舞踊を体験者は0。「すべての参加者に対して、新しい身体運動を提供できた」とのこと。



一般参加事業

10/13~15

3 days

[演劇と映画]

ワナナワとワナナワ

演劇が原作となった映画、その両方をいっぺんに観る試み

同じ原作による同じテーマの演劇と映画を連続鑑賞し、表現形態の違いを比較しようという企画。売込隊ビームのファンを中心に総計170名が参加。生の雰囲気の中で内容を伝える演劇が鑑賞者との相互作用によりその場その場の表情を生み出すこと、一方で映画は完成された作品に対して鑑賞者が思いが重ねながら内容を解釈するという特性が明らかになった。



特別参加事業

10/9

Mon

[ワークショップ]

ライフバランス・ワークショップ in 應典院

あなたらしく充実した人生の作り方

ライフバランス協会による自分らしい人生づくりのヒントを分かち合う学びの場。10代から60代まで、キャリアカウンセラーやカラーコーディネーター志望の方、転職活動中の方など、多様な人々が和やかな雰囲気の中で語り合い。企画者の中尾憲司さんは「会場がお寺ということもあり、自分の人生設計について考えるのにはまたとない素敵な場所でした」とコメント。



一般参加事業

10/7

Sat

[ダンス&ワークショップ]

インド舞踊ワークショップ

まなざしを向ける

女性15名の参加者のなか、アトリエ・ナーチェナーチェのメンバーより6名と企画者の浜田さえこさんが講師に。研修室前のアプローチ部分に展示した衣装が場の雰囲気と合っていたと好評だったもよう。「皆さん興味を持って一生懸命、身体を動かしておられ、短時間ではありましたが、踊りという芸術を共有できたように感じました」と浜田さん。



一般参加事業

10/20~22

3 days

[演劇]

Yuko's note プロデュース 新釈・夏の夜の夢

だって、あなたが好きなんだもん!

「出会い・すれ違い」をテーマとした丹原祐子さんの初プロデュース公演は、演出家・DAIさんとチームワークも含め、初めてづくし。オーディション兼ワークショップを通じた形式で俳優を募るなか、新しいシェイクスピアの上演に挑戦。最終動員は565名。終了後には「これほどに『演劇をする場』『表現する場』を求めている人がいるのか」との実感が違ったとのこと。



一般参加事業

10/16,23,30

Mon

[ワークショップ]

クレイアニメをつくらう!

新しい「トモダチ」をつくる3日間

のべ24名が参加。劇団主宰者であり教育ファシリテーターもつとめる岡野真大さんが参加者の創作意欲をかき立てた。制約条件は3回で「15秒」の作品制作すること。それぞれに創意工夫と効率的な作業工程へ注意が向けられ2作品が完成。参加者全員には作品集CD-ROMがおみやげに。参加者の中には続編の制作を目指して残った粘土を持ち帰る方も。



特別参加事業

10/9~11

3 days

[トークと演劇]

Low Powers presents 温かな発電所

あるいはたばこをやめられない医師に対する看護婦の一言

「純粋な演出家による身体表現の新たな可能性」を総計96名が確認。終了後に寄せられたコメントも演出家らしいもの。「演技の上手下手で言うならば、プロの演者である『役者』たちには、敵わなかった。」とのことばに続けられていたのは「役者は演技をする。が、演出は表現をするのだ。その一点、演出は、役者を上回った。」それぞれの今後の動きに眼が離せない。



特別参加事業

10/8

Sun

[トーク&カフェ]

お寺 de サイエンス・カフェ第2回

命を使う、いのちを慈しむ。

大阪大学コミュニケーションデザイン・センターによる片倉啓雄大阪大学助教授と秋田光彦大蓮寺・應典院住職の「科学と宗教の対話」。約20名が参加。「『ひとりひとりの生き方』そして『科学』と話題の幅を広げるということに貢献できた」とのこと。今後もより広い参加層への周知と、話題の振り方を改善し、お寺という空間を生かした企画を実施予定。



一般参加事業

コモンズフェスタ 2006

参加企画を振り返って

1ヶ月間にわたって繰り広げられてきたコモンズフェスタ。以下の関連企画も合わせて、全企画を縦覧していただくと、まるで絵はがきのように、一つひとつの企画が醸し出す全体の彩りを感じ取っていただけるのではないのでしょうか？こうして企画の厚みが出た反面で、これまで慣例としていた「モニターボランティア」の起用や参加団体の皆さんによる「実行委員会形式」での運営を行わなかったために、企画団体どうしのつながり、ひろがり、まとまりが生まれなかったという点は反省材料です。また来年度も、今年度の成果を踏まえて、表現活動を通じた社会的な問題提起と人材育成のよりよいかたちを求めて参ります。

10/31

Tue

大阪発信：お寺の「実力」

社会参加仏教と現代

【トーク】

コモンズフェスタ 2006 のクロージングイベントは「社会参加仏教」をテーマにしたトークセッション。インド出身で日本における仏教と地域社会の関係を研究するランジャン・ムコパディヤヤさんの基調講演に続き、大阪で地域の問題解決の実践に取り組む僧侶が事例発表。67名の参加者とともに、社会に貢献し、社会で責任を果たすお寺の姿を探求。



自主企画事業

10/28

Sat

療養環境フォーラム in KINKI 4th

【フォーラム & 交流会】

療養環境ってなあに？院内教育について

毎年恒例、病院でのアート活動を中心に取り上げてきた「療養環境フォーラム」。35名が、2名の講師から院内教育を現状を学んだ後、まず2つ、さらに4つの班に分裂。話す中で湧いて来た興味をフォローして行く会に。「家庭科の授業でのビーズプレスレットづくりが保護者に喜ばれ」「何か形が残る手作りのものって、重要」など、具体的な経験交流の場に。



一般参加事業

10/24

Tue

高齢者問題を考える3

【レクチャー & ステディ】

不安を乗り越え、明るい未来へ向かっていくために障害者問題に取り組む「自立生活ステーション You Can」による企画。代表の宮崎茂さんとヘルパーの宮本泰成さんと、2名の参加者という、合計4人の少人数セッション。少人数だからこそ、という議論の場が創造され、日常生活の見つめ直しの機会に。よりよい福祉の実現のために何が必要なのか、現実問題を全員が再認識。



一般参加事業

ブレ企画

9/19

Tue

應典院コミュニティシネマシリーズ Vol.6 Trad (慣習) and Trend (価値) ~流されず問いかけること~

ウスマン・センベヌ監督作品「母たちの村」を上映。トークゲストにお招きした岡真理さん、伊田広行さんの魅力も重なって作品の世界を堪能。



インターン企画

10/4

Wed

ブツカフェ特別篇 「信じるものはスクワれる」のか？ 若者と宗教を考える

大蓮寺・應典院の小僧インターンが仏教を学ぶ自主ゼミ「ブツカフェ」特別版。キリスト教主義教育の高校の元教員と僧侶と共に「信」に接近。



アフター企画

11/2

Thu

クリエイティブ・カフェ拡大版 対話が生み出す創造都市 [CAFE] の出版を記念して

都市・文化・アート、といったキーワードでつながらる「クリエイティブ・カフェ」という対話の場。書籍出版記念の機会と重なって大盛況！



10/29

Sun

第46回寺子屋トーク

【レクチャー】

死者とのコミュニケーションは可能か？

内田樹さん、釈徹宗さんという気鋭の研究者2名によるトーク。後半の質疑応答の時間は、さしずめ「死者」とわれわれの向き合い方に関する「例題解説」のように、比喩も用いながら抽象的な概念を徐々に説明。79名が終了後の交流会の時間まで知的な対話の空間に浸り、「自分の思いや考えに形を与えていく作業は実に充実感があります」という感想も。



自主企画事業

10/25

Wed

ことばを人生の味方にしよう

【トーク & カフェ】

命を使う、いのちを慈しむ。

毎月1回、水曜日の19時30分から行っている詩の学校。講師は「詩ということばにはお寺の字が入っている」と、お寺で詩に触れることの意味を語る上田假奈代さん (cocoroom 代表)。「コモンズフェスタのパンフレットを見て」という方も交え、常連さんとともに12人が参加。それぞれに詩作し朗読することをとおして、日々の暮らしの見つめ直しの場に。



一般参加事業

**ちよつとの一言①** 今年は2年の休会を経て、新主幹のアイデアが存分に盛り込まれた「コモンズフェスタ」だったように思う。2つの倶楽部主催事業、2つの共催事業に参加して、主催事業は「應典院倶楽部らしさ」が際立っていることがわかった。その「らしさ」というのは、いのちと死に向き合う姿勢だ。共催事業にも應典院スタッフがファシリテーターとして参加するなどして、應典院カラーを出してもよいのではないだろうか。とはいえ、新しい方向性を見つめようという意志を持った「コモンズフェスタ」の再開を楽しませてもらった。**【木村慶次（應典院寺町倶楽部会員）】**

## スタッフ座談会



「怒濤」「怒濤」と語り続けたスタッフの思いを、1ヶ月共に過ごしてきた  
美術家・岩淵拓郎が聞き出す……。



岩淵拓郎 (美術家)



大塚郁子 (應典院寺町倶楽部スタッフ)



蔵田翔 (大蓮寺・應典院小僧インター)



小林瑠音 (コモンズフェスタボランティア)



城田邦生 (應典院寺町倶楽部スタッフ)



山口洋典 (應典院寺町倶楽部事務局長)

### ▼そもそも「コモンズフェスタ」とは

――まず、これまでの経過をお聞かせください。

大塚：コモンズフェスタとはそもそも、NPOやアーティスト等、多様な分野で活躍されている方たちが向き合う問題持ち寄りって披露する場、また専門家が「たこつぼ化」しないよう相互交流を深める場、それらを應典院が提供しようということで始まりました。98年から03年まで続けてきて、04、05と2年間休会。

――昨年は意識的に休暇にして、振り返りの年、次年度にむけて体力を養う年にしました。

――それは一度立ち止まってふりかえる必要があったからですか？

大塚：はい。NPOの相互交流をと、実行委員会形式にしていたため、4月から半年くらいの準備期間を設けていました。しかし参加いただく皆さんも自身の活動も多忙な中、そうした会議に参加いただくことが相互交流になるのか、という疑問も出てきました。また、コモンズフェスタが始まった当初は、NPOの存在そのものが新しくなったのですが、徐々

### ▼2006年の特徴

――1ヶ月間という期間設定の理由は何？

山口：一番大きかったのは、10月の最初の日曜日(他団体と共同主催する事業が入ったこと)です。初夏の頃だったと思うのですが、その時は10月の應典院の混雑具合が低かったんです。私が働き始めたからには新しい味を、と、その日を起点に「コモンズ月間」にしようとしてスタッフに呼びかけました。その後、スケジュール帳の空き予定を埋めていくかの如くに事業を誘致し、場合によっては企画を立てていこうと、と半ば強引に忙しくさせていきました。

――参加団体はどう決まったのでしょうか？

山口：一般に公募してエントリーしてという形式ではなく、スタッフが呼びかけての

組み立てでした。この時期に何かをしようとしている人達に声を掛け、集まった企画群を「場のまなざし」というテーマでくくりました。そして、とにかく應典院の使われ方の多様性をみせる、そして我々もその使われ方に学び、次の展開に活かしていこうと思いました。

――スタッフのみなさんはどんな印象ですか？

小林：それぞれの企画のテーマが多岐に渡っていて、内容も幅広かったのが印象的でした。そして参加者も幅広く、若い世代にはあまりなじみのなさそうな仏教や死を扱った企画にも自分のような学生が多かったのも意外でした。

蔵田：ほとんどすべての企画に参加し、應典院でやるからこそ意味がある企画もあったと思います。人生の過ごし方、生きること、死ぬことなど、お寺でご本尊を前にして語るというこの意味や力を感じました。

城田：應典院のスタッフとなったのは去年の夏からですので、コモンズフェスタに本格的

に社会的な認知も高まってきました。ですので、アートとNPOを前に出して事業をすることにについても考えてみよう、と。

――相互交流を狙いに据えていたのはなぜですか？

大塚：やはりそれは應典院が場所だから。NPOの中には独自の場をもたない団体もあります。その一方で、「場所をどう動かしていくか」ということで出来たのが應典院寺町倶楽部であり、「お寺を開いていく」ことがその活動の趣旨です。そのため、必然的に相互交流が柱となりました。

に関わったのは今回が初めてでした。裏方全般を担当し、NPO、アート、演劇、舞踊、セミナー、ワークショップと、いろんな形の表現活動が集中するという企画の多様さが特徴だったと思っています。精神的にも体力的にも大変だったが、やりきってみて、これだけのものが應典院という場所の求心力によって集まり、一気に表現できるという事はそうそうあることではないと感じました。

大塚：大変だったというのが一番に来るけれども、應典院の多様性が現れたと思います。應典院の持つ力の集大成がコモンズフェスタにできつつあり現れたように思えます。ただ、運営する側としては、とりこぼしている部分もあり、反省点もあります。ただ、インターンやボランティアなど應典院を支えてくださる人々、應典院ファンといった様々な人々と出会うのもコモンズの特徴。そういう意味でも2年間のプランクを経て今年開催してよかったです。

### ちよつとの一言②

今回「Low Powers」の公演に役者という形で参加させていただきました。普段の生活としては、なかなか関わることのない場所なので、お寺の本堂で公演をさせていただくことに非常にやりがいを感じました。ならびに、應典院の方々には大変親切な対応をいただき、深く感銘を受けました。おかげさまで、とても気持ち良く公演を行うことができました。感謝でいっぱい입니다。個人としては、「コミュニティ」シネマのサポートスタッフとして、お手伝いなどもさせていただいたり、貴重な体験ができたことを嬉しく思っています。**【金谷二義（劇創社）】**

**ちよつとの一言③** 演劇から死者に関するトークまで、普段應典院を場として展開される多種多様な催し物が1ヶ月の間に凝縮されたこの一大イベントにインターンとして参加し、毎月開いている若者仏教講座「ブツダカフエ」の特別篇として、ゲストをお呼びして若者と宗教に関するトークを開催しました。この企画を通して、若い人の中でも宗教に関心を寄せる人は少なくないと思います。加えて「場があるならば酒がなければならぬ」と(決意に近い形で)実感しました。ご参加・ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。**【日高明(小僧インターン)】**

▼スタッフごうしの関わり

—それぞれがスタッフとして関わって学んだこと、持ち帰ったことはありますか？  
 小林：應典院の自主企画にはほぼ参加したのですが、一参加者としてもボランティアスタッフとしても楽しめました。ボランティアスタッフとしては、通訳やコメントなどで、大勢の人々の前で話をする機会を頂き、とてもよい経験となりました。一参加者としては、日頃接することのなかったテーマに触れ、考える機会をいただいたことは大きな成果でした。  
 蔵田：今年から大蓮寺・應典院の小僧インターンとして應典院に関わってきましたが、今までで一番應典院らしい期間でした。非日常が日常になっていた一ヶ月間に、自分が企画に関わったものも含めて、場をつくりあげる

ことがどれだけ大変なかがわかりました。

城田：毎日違うイベントゆえに、常に場面転換が必要なのが「苦勞」でした。ボランティアスタッフの方や劇団の方に手伝っていたいたもの、それぞれに要求が異なる上、急な対応は一人でせざるをえないこともありました。ただ、やりきっていく中では、應典院の、もしくは今のスタッフワークでの可能性をい意味でも悪い意味でも出し切ったのではないかな。同じ題材を扱った演劇と映画を一緒に上演・上映するなど、今までなかった企画も実施され、「こういった引き出しが應典院にもあった」と発見できたという意味では極めて画期的な事業だったと言えるでしょう。

大塚：ただし広報には反省点があります。全体をとりまとめる事務局として、総合パンフによる広報を進め、個別の事業の広報協力ができなかったことです。独自に頑張ることができず、また出来ない団体それぞれ事前にお伝えす

▼今後に向けて

—スタッフそれぞれの應典院という「場へのまなざし」にはどんなものがありますか？  
 城田：今回、1ヶ月の企画を行ってみて、今後の方向性として「カオスから曇茶羅へ」という言葉は思い浮かびました。今回は混沌とした現場が続いたわけですが、それが純粹に培養、熟成されていって「カオスから曇茶羅へ」と消化されていく過程こそ、應典院の新しい10年を凝縮しつつ、さらなる表現の場になるかな、と。大塚：スタッフでいると應典院はわかりやすいんですが、一参加者として企画に参加された場合にはわかりにくく、さらにはコモンズというのが見えてこない、そんなまなざしです。  
 —お店であれ、何であれ、真ん中にあるのは場所ではなく人。有名ママがいて、そのお

店に通つたよつに。そういう観点で見ると、應典院とはどんな場でしょう？

大塚：そういう意味では、2階のロビーから見えるお墓や生國魂神社の緑など、周りの風景が醸し出す雰囲気か應典院という場所の力を高めていると言えるでしょうね。

蔵田：そう思います。應典院には人と人から生まれる場の空気だけではなくて、ご本尊だとかお寺そのもの、あるいはお墓といったものがあるので、場の力は強いのでは？

小林：であれば、いろんなイベントをそうした場で濃密に一つの期間でやる際には長い目で見ないといけないのではでしょうか？場所というものは何もしなければあるだけだし、何かをすれば大きなエネルギーが生まれます。よくあるフレーズかもしれませんが、何かを続けていくことが重要で、かつそれは難しいことだと、実際関わってみて、強く感じました。  
 山口：重要なのは誰がやっているのかよりも

ることが必要だったのではないかと。

—どれだけの企画者にコモンズフェスタへの参加意識が残ったかが疑問というところ？

山口：今回は城田さんがLowPowersに出演、小林さんが最終日の通訳、蔵田くんがライバルンスの企画の一参加者にと、スタッフの企画者や参加者など、まるで覆面パトカーのように場面場面で顔を変えていました。そうやって表も裏も両方体験すると、コモンズフェスタ全体に関心が向きますが、どれか一つだと愛着やこだわりは薄くなりがちと言つてよいと思います。全体の雰囲気づくりという課題です。

大塚：今回、多彩な形態での表現が交差しています。というのもも期間中、岩淵さんの作品は定点とコモンズフェスタを象徴する存在。つまり、應典院に来る誰もが、日には違えども出会うものでした。そうした関心の違う人たちが異文化と出会う場を創る要素が大事ですね。

何をやっているか、さらに何故やっているのか、だと思つています。時々刻々と変化し、同じ風景が二度とない場所をみんなが楽しみ続け、悩み続け、その楽しみや悩みに反応し続けること、それがイベントを続ける意義ではないでしょうか？常に誰かに「ここで何かしませんか」と考えるきっかけを投げかけ続けているのが應典院は、イベントの百貨店でもコンビニでもなく、雑貨店かな、と。店に入つて「ごめんください」と言えば誰かが出てきて、何か奥のほうから出してくる、そんな場になれば、というまなざしを持っています。

—お話を伺つて、應典院らしさというところばが何度も出てきたのが印象的でした。らしさというものが、一箇所に短期間に集めることで見えやすくなって、それを感じた人が日々の活動に持ち帰ってつなげていくのがコモンズフェスタかな、と受け止めました。  
 一同：そうですね一ヶ月間ありがとうございました。

**ちよつとの一言④** 「人がどう生きるか」など、実体験に基づいた語りに興味があり、寺子屋トーク2つを含め、6つのプログラムに参加した。岩淵さんと上田さんの対談を聴いて、「詩の学校」を受講することにした。語りを聴くだけでなく、人前で詩を読むという初めての経験は、気持ちのよいものだった。そのためか「應典院では、心をふるわすことをやってくれる」と期待するばかりでなく、自ら講座を企画したいという気持ちが湧いて来ている。対象を絞りその人たちをつなげようとする「コモンズフェスタはいい試みだが願わくば、もっと多くの人にその活動を知らせてほしいと思う。」**【村上聡一(参加者代表)】**

コモنزフェスタ 2006 に寄せて ----- チャーハン・ラモン

Low Powers 「温和な発電所」の本番前日。リハーサルも一段落済み、コントを一生懸命作っている私たちは自嘲的に「相変わらず俺たちも馬鹿なことしてるなあ」などと話しながらロビーでタバコを一服していた時の話です。机の上には普段は置いていないちっちゃなガラスキューブが。よく見ると中に文字が書いているじゃありませんか。それは確かこんな事が書いてあったのです。「[馬鹿] 愚かな事」。

これが岩淵拓郎さんのインスタレーションとの出会いだったわけです。よく周りを見渡すと、あらゆる所にガラスキューブ。それぞれが別々の言葉になっている。私たちのコン

トはこの至極ありふれた言葉、忘れがちな意味に囲まれて行われたのです。

コントなどの「非常識」な事を表現する事において「常識」というのはとても大事です。少しややこしい話ですが、お客様が「非常識」な場合、私たちが舞台上で「非常識」を表現したとしても、「常識」になってしまうからです。

このコモنزフェスタに訪れたお客さんはみんなこのガラスキューブを見学し劇場に入ったのです。これはすごい事かもしれませんよ。常識的な言葉に触れて、非常識なコントを観る。そう考えると私はワクワクするのです。

(劇作家 / Low Powers 作・演出)

コモنزフェスタ 2006 に寄せて ----- 積 徹宗

2006年の「コモنزフェスタ」。その終盤に、2度、登場させてもらいました。ひとつは46回目の「寺子屋トーク」。こちらは現代思想研究者の内田樹先生とトークセッション。もうひとつは、シンポジウム「大阪発信：お寺の〈実力〉」。「寺子屋トーク」のサブタイトルは、「死者とのコミュニケーションは可能か」というものでした。つまり、イタコの言うことは本当かどうか、という話です。うそうそ。内田先生による「死者とのコミュニケーションこそが人間を基礎づけている」という刺激的な問題提起を受けての企画です。シャーマンの話になることなく、このテーマに取り組むためには、死者やコミュニケーションの定義を変えるところから始めないといけません。

簡単に先行きが見えない、ある意味、正解のない問題に繰り返し食いつくのは、楽しいです。

シンポジウムのテーマは「社会参加仏教と現代」でした。サンフランシスコ大のネルソン先生による「日本のお寺に行っても仏教はわからない」というコメントは(当然知っているはずなのに)あらためてショックを受けました。ううむ、まずはここからか…。

終了後のワンコイン交流会では、ある医療・介護関係の方に「むつみ庵には、ドギモを抜かれた」と言われました、わはは。

一ヶ月にわたる企画を成し遂げたスタッフに敬意を表します。

(宗教学者・浄土真宗本願寺派如来寺住職)

コモنزフェスタ 2006 に寄せて ----- 上田 假奈代

ひなたも雨の日も。いっしょに育ててもらうよろこび 應典院のこけら落としに朗読をしたのが9年前。オープニングイベントを手がけた写真家に呼ばれて、インタビュー原稿を朗読する役目を引き受けた。広く多目的なホール、お喋りが弾むロビーエントランス。熱気のある会場。それまでみたどんなお寺よりも魅力的だった。何かが生まれる予感があった。

京都で活動していたわたしは大阪については何もわかっていなかったし、社会参加の意識はまだ曖昧なものだった。その2年後に大阪に拠点を移すと同時に應典院の扉をたたき、「詩の学校」が生まれた。「詩を仕事にする」と決め、公益性とは何か、仕

事とは何か、を考え始め、應典院の活動から社会とアートの関わりを学びながら具体的な経験を積み重ねた。走っている應典院を追いかけるようなかたちで。

應典院はさまざまな人々による具体的な活動の提示を行う交差点だ。であいを携えて門がひらく。思い込みよりも伸びやかな好奇心や関心がであいをつないでいく。コモنزフェスタではそれがより一層強調される。どの日に行っても何かがあった。であいが生まれていた。その場をしつらえてくださったスタッフのみなさんの努力に頭がさがる。これらの体験を自身でひきうけ、次へとつなぎたい。

(詩人 / 詩の学校主宰)

コモنزフェスタ 2006 に寄せて ----- 岡野 真大

不思議なひと月だったなあ、と。いつもの應典院という場所は、格式の高い和食から正統派フレンチ、中華料理にエスニック、カジュアルイタリアンや大衆食堂の定食まで、日替わりで色んな料理が出る不思議なレストランです。しかし、この10月の間は、大きな鍋でひとつの料理をトロ火で煮込み続けているような、継続した「熱量」が漂っていた気がします。時々ワツと強火で具材を炒めて、香ばしい匂いがする日もあったりしながら。

ボクの担当させてもらった『クレイアニメをつくろう!』という講座は、毎月曜日の夜3回のシリーズで、クレイアニメを実

際につくってみよう、というワークショップでした。いつもは舞台演劇を創っているボクが、分野違いの芸術作品を少人数の皆さんとじっくり創る、という不思議な企画です。

本当に小規模な企画でしたが、何かをもらって帰るのではなく「生み出す場」となっていて、「コモنزフェスタ鍋」の中の隠し味ぐらいにはなったかなあ、と思っております。ご参加いただいた皆さん、應典院の皆さん、ご協力いただいた各位に感謝。

また、應典院で面白い料理に出会えば、と思います。ごちそうさまでした。

(KbZoffice 代表)



## Low Powers

【ろーぱわーず】



<http://west-power.co.jp/theatre/main.htm>

2004年8月にプラネットフェスティバルへの参加に際し、関西で活動する劇作家、チャーハン・ラモーン、桂正樹、城田邦生の3人ユニットとして始動。作・演出をチャーハンが手がけ、普段、演技などしたことがない桂、城田そしてチャーハンが演じ、たった15分という短いコントであったが、観客の好評を博す。2005年8月、調子に乗って再びプラネットフェスティバルに参加。城田が自劇団の公演のためにお休み。代わって、井田貴仁が参加。4人ユニットとなる。ここでも、井田の特徴を生かしたコントを上演し、物議を醸しながらも好評に終る。2006年10月、今回のコモンズフェスタに参加。それまでの15分から突如1時間という枠を与えられ、4人では不可能という結論に達し、関西小劇場の友人を巻き込んで、決行。2007年3月には、大阪市・大阪都市協会の主催事業として、大阪各所でのゲリラ公演を企画。名が体をあらわす通り、脱力系のコントユニット。



## 売込隊ビーム

【うりこみたいびーむ】



<http://west-power.co.jp/theatre/main.htm>

山田かつろう（座長）が大坂芸術大学在学中に横山拓也（主宰）らを誘い勢いだけで劇団を結成。1996年10月に旗揚げ公演。役者の大半は大坂芸術大学舞台芸術学科出身で、手堅くも個性豊かな演技は評価が高い。関西小劇場でのゲスト出演は他劇団の比にならないほどに多く、役者の年間出演本数は、平均5本、多い者で10本を超える。大学卒業時に『トバスアタマ』で第1回大阪演劇祭 CAMPUS CUP'99 大賞を受賞。その後、rise-1 演劇祭、パルテノン多摩演劇祭などにも参加する。

作風は、シニカルな視点とミステリの展開とコメディの要素をもって、着実な物語を展開させながら、「毒」と「笑い」を絶妙なバランスで描く。有りそで無さそな状況設定も、気の利いたトリックと巧みなウソででっあげ、笑っているうちに気が重くなる、一風変わったコメディ作品に定評がある。役者たちのテレビ出演なども多数。

コモンズフェスタ  
2006参加!



## Yuko's note

【ゆーこずのーと】



<http://west-power.co.jp/theatre/main.htm>

劇団P・T企画の制作、丹原祐子のプロデュースユニット。演出のDAIの協力により2006年、1回目の公演『新釈・夏の夜の夢』を上演。演出家DAIのワークショップを経たオーディションにより、大半のキャストが決定。『子供から大人まで楽しめる』作品作りを目指し、初プロデュースながら全てのステージがほぼ満席となる大盛況のうちに幕を閉じた。

丹原祐子が所属する劇団P・T企画は観客参加型のミステリーの上演し、お客様自ら楽しんでいただける作品作りを行っている。

上記の流れを受けたYuko's noteは作品のジャンルにこだわらず、誰もが楽しめる舞台作品、また表現者が更にステップアップする場所とした活動を目指す。



## KbZoffice

【ケービースオフィス】



<http://www.geocities.jp/kbzoffice/>

97年4月結成。地方局テレビ番組出演のためにはじまったコントユニットから、やがて小劇場演劇を中心としたユニットに。代表・岡野真大の描く「静かなエンタメ」作品を中心に、サスペンス、アクションものなど、多彩な舞台を創る。また、京都・大阪の小劇場スペースだけでなく、アートギャラリー、寺院、廃工場跡などで公演を行ったり、美術作品とのコラボレーションや他劇団との合同公演を行ったり、さらに、利賀・演出家コンクールへの参加(01、03年)、アトリエ劇研主催のコント公演(02年)へ参加したりと、その表現スタイル・分野も多岐に渡る。

最近、演劇と、他ジャンルの芸術活動やファッションスキルなどを融合したワークショップや、京都市東山青少年活動センター・創造活動室の管理運営など、芸術アウトリーチや教育的活動も積極的に展開している。

年間3万人の若者が集う寺「應典院」は、ここで紹介させてもらった以外にも数多くの劇団により、支えられています。應典院では、毎週のように、彼らのような若い劇団が公演をおこなっておりますので、お時間があれば、ぜひ、お運びください。



應典院寺町倶楽部では、このように應典院を活動の場にしていただいている方々と寺町倶楽部の会員のみならずとの出会いとつながりを広げるべく、会員制度の充実を検討中です。生活に演劇を取り入れてみませんか?STAGE IN YOUR LIFE。應典院からの提案です。

## はじめに - 0 から 1 を踏み出せる場所



大阪市現代芸術創造事業の一環として昨年12月12日にオープンを迎えた築港ARC(正式名称:アートリソースセンター by Outenin)。アートに関する多様な情報資源の収集 / 公開 / 流通を目的としたこの施設では、とりわけ、関西で先進的な芸術社会活動を行っているグループの紹介企画を開始しています。

作家活動も行う私が、ここ関西で活動してきた経験から得た強い感覚、それは「一度コアな情報に辿り着けば、後は芋づる式に次の情報に繋がる」というもの。これは関西のアートシーンに少なからず関わっている人であれば、誰もが持っている感覚なのではないでしょうか。しかし、この「一度コアな情報に辿り着けば」の「一度」の機会、この機会を得るプロセスに高いハードルが存在するのかもしれない。

比較的マスメディアが取り上げやすい商業的な芸術領域であれば、本屋に行ったり、テレビを見ているだけでも情報が流れてくるとは思いますが、事業名称にある通り、我々築港ARCスタッフが扱っているのは「現代芸術」という領域の情報です。ただでさえ、一般的には難解なものと思われがちなこの「現代芸術」という分野。しかし少しでも文化的関心をお持ちの方、または知的欲求の高い方にとって、この分野との「出会い方」や「出会うタイミング」の如何により、抵抗なしに素直に楽しめる可能性もまた同時に存在すると思うのです。

まずは築港ARCを「現代芸術に出会う第一歩を気軽に歩みだせる場所」と位置付けて、そしてその主旨を念頭に、様々なカタチで情報をアウトプットしてゆく、そのように考えています。

<写真: 築港ARC入り口よりイベントチラシ・ボランティア情報の掲示エリアを望む>



## アート情報の共有と 連携のデザイン

# 「築港 ARC の展望」

50

by Outenin

ARC

2

ARC

## 何か一つでも手掛かりを持ち帰れる場作りを心がけて



「芸術に関する相談窓口」という言葉を聞いた時に、皆さんならどのようなイメージをお持ちになりますか？まずよく聞く意見として「実際にどんな相談があるの？」とか「そもそも相談することなどあるの？」などなど。かなり事業の根幹に関わってくる意見ですよ。正直、この事業を開始する以前はディレクターである私でさえ、その問いに対する確固たる答えを持ち合わせていませんでした。

ただ個人的な経験から述べると、過去に自分がアーティストの友人やお世話になっているアート関係者に具体的な相談を持ちかけた例は多々存在しており、それを「相談」といった概念で意識していなかっただけなのは、と思ひ返しました。

実際、事業を開始してみると、まだまだ数は多いとは言えませんが、様々な種類の相談が持ちかけられました。その内容は「○△上映会のチラシの設置場所を教えてください」「大阪で▽□○さんの舞踏のワークショップをしたいのだから良い会場はないか」といった具体的なものから、「アート系のボランティアがしたい」といったもう少し漠然としたものまで多種多様。

しかし相談に来られる誰にも共通する点として挙げられるのは、「相談していく過程で自分達の相談の核心を捉え直してゆく」ということです。芸術に限らずどんな悩み事や考え事でも、一人で考えるよりまず誰かに言葉として伝えることで、頭が整理されることってありますよね。築港 ARC という場所が「アートな思い付きを整理するところ」に自然となってゆく現状を改めて認識しています。

そしてせっかく尋ねて来てくれた相談者に、何か一つでも手掛かりを持って帰ってもらえるように、スタッフ一同、日々情報収集を心がける今日この頃です。

<写真：常駐スタッフのワークエリアでの朝田ディレクター>

## 情報アウトプットのカタチ



さて、具体的な企画についてお話をします。前述致しましたが、築港 ARC では、関西で先進的な芸術社会活動を行っているグループの紹介をしています。まずはスペース内に、小規模ながら充実した、またジャンルに縛られない自由な活動をしているオルタナティブアートスペースの情報ライブラリー「オル棚」を設置しました。関西のアートシーンの個々の動きをまず「見えるカタチ」にすることを念頭に始めた企画です。ライブラリーには長年関西演劇界で活動してきたスタッフによる劇場使用内容に特化した情報も収集されています。

しかしライブラリーに収められている情報だけでは、どうしても情報に「ライブ感」を伴いません。これはライブラリー本来の機能性として「情報の即時性」に向かないという点が挙げられると思います。そこで、ライブラリーを一つの契機として、さらなる現在進行形のコアな情報を提供する機会を設けました。

それが3月より毎月第3土曜日（原則）に開催するトークサロン「ARC トークコンピレーション」です。関西で活動しているアーティストやアートディレクター、またアートの枠を超えて様々な社会実践を行うゲストを招待し、プロジェクト事例を紹介する企画です。

また、このようなカタチで築港 ARC の拠点に集められた情報を、メディア（ホームページ、ネットラジオ等）を駆使して、さらに社会に広く公開する仕組みも同時に整備していきます。

<写真：関西のオルタナティブスペース情報や劇場情報が揃うライブラリー>

## 築港 ARC スタッフ紹介

築港 ARC で活動する 3 人のスタッフを紹介!

各々が様々なアートの領域で活動しながら、その経験から得た知恵を築港 ARC に集結します!



### 桔梗谷 光生

【ききょうたに・みつお】

芝居を続けてきて 10 年近く経とうとしています。芝居で培った力を基に、スペースの使い方を含め、来られた相談者の力になります。普通の利用の仕方だけではなく、相談者、スペースの個性を今まで以上に発揮できる、独創的なものができるように考えます。イベントをしたいけどパフォーマーがない。こんなところでイベントをしてみたい。ぜひひびき難題をお持ちください。



### 小林 瑠音

【こばやし・るね】

築港 ARC ではアートボランティア情報を中心に色々なアートイベントに関わっていきたいと思います。普段は大学院で公共政策の勉強をしています。特に文化政策に興味を持っています。文化、芸術が出来るようになっていく過程に身を置いていることが好きなので、築港 ARC を通じて自分自身も色々な世界と繋がっていきければと思います。魅力的な関西のアートシーンを紹介していきたいです。



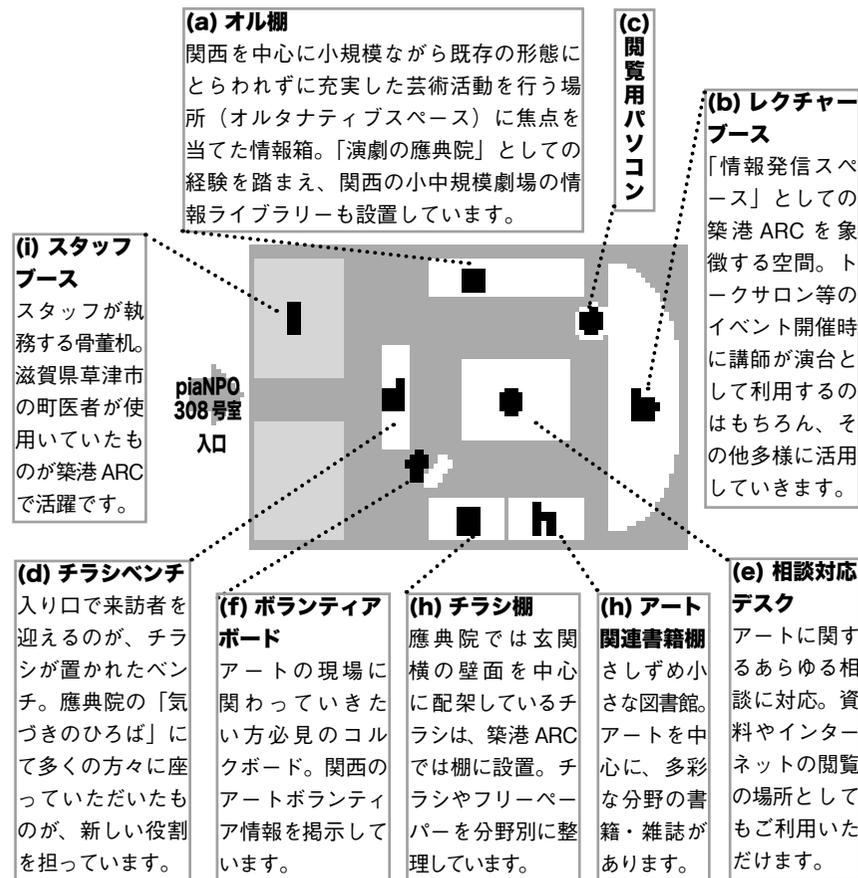
### 榎田 聖美

【ますだ・きよみ】

普段は、関西小劇場で制作として受付や、劇場(公演期間)に入ってからチケットリング、情報宣伝を主に仕事としています。現在の小劇場の状態では、初めて「お芝居の公演をしたい」人達には劇場の情報を見つけ難く、手に入り難い物です。各劇場のリストを作成するなどの方法で、演劇初心者の人達でも簡単に劇場情報を手に入れられる環境を作り、築港 ARC を基に、小劇場を利用する人達の情報交換を、と思っています。

築港 ARC (正式名称: アートリソースセンター by Outenin) は、大阪をはじめとして関西で行われている先進的なアートの取り組みが情報コンテンツとして収集、公開、流通されることを目的とした場です。「ARC (アーク)」とは「Art Resouce Center」の略であると同時に、英語の「arc (弓状のもの)」の意味をも重ねています。築港 ARC が弓となり、そこに携わる人々が矢となって、現代芸術の創造の担い手として社会に出て行くきっかけを提供したいという思いが込められています。関西の先進的な芸術活動の情報センターとして、また芸術に気軽に触れ合うことができる総合窓口として、多彩なプロジェクト展開される拠点にどのような機能が盛り込まれているか、紹介します。

空間デザイン: 小山田 徹



開設時間: 毎週火～土曜日の正午から 20 時 (年末年始、夏期休暇除く)

〒 552-0021 大阪市港区 2-8-24 piaNPO 308

tel・fax 06-4308-5517 e-mail arc@outenin.com

URL <http://www.webarc.jp>



# 今生きている方々の願いに応えるお寺・應典院

清史彦 (真宗大谷派瑞興寺住職、NPOビハーラ21事務局長)

私は、大阪市平野区にある、約450年の歴史を持つ浄土真宗のお寺の住職です。地理的にも車で30分ほど離れていますし、何より「宗派」が違います。宗派や地域が違えば、まずお付き合いなどないという閉鎖性が、お寺業界の常識です。一般の方なら何とも思わないでしょうが、違う地域の違う宗派の僧侶である私が語ることができるお寺であること、この辺りからも「應典院」のユニークさがすでに伺えます。

この連載では3回にわたって應典院とはどんなお寺なのか語りられてきました。今回は、一人のお坊さんの視点で、これまでとは少し違った語り口で、應典院について語っていきます。

## 1、出会いとつながり、そして広がり。

應典院そして秋田光彦住職と私とのご縁が繋がったのは、95年の阪神淡路大震災のお陰です。その数年前、私は東京、渋谷道玄坂の、あるキリスト教会のイベントに参加したことがありました。その教会の建物はイベントホールになっていて、狭い意味でのキリスト教の行事だけでなく、「いのち」に関わるいろんなイベントが催されており、私が参加したのは、人権抑圧されている民衆に寄り添う音楽活動をしている、ある外国のバンドの演奏会でした。当時からお寺の閉塞性を感じていた私は、そのようなキリスト教会の在り方に、佛教寺院の持つ可能性を

感じ取ったのでした。そして、そのような試みを、この大阪で始めようとする僧侶に、大災害からの復興の中で出会ったのです。

1月17日早朝のあの大地震に際して、当初、何をしようか分からず右往左往していた私でしたが、3月になって、知り合いのお坊さんからの、「そろそろ、食べものや衣服といった直接的な援助は行き渡ってきた、今問題なのはスピリチュアル(注1)な問題だ」という示唆を受けて、3月初旬から、佛教青年会の仲間たちと御影中学校の校庭にテントを張って、「VOWS CAFE」と銘打った「ボランティア喫茶店」を始めました。この試みは、被災者たちの安らぎ、語らいの場として、またボランティア達の交流の場として大好評を得ました。夜には自然と「坊主バー」(注2)にもなって、人と人が支えあうこと、ケアする人のケアの大切さも、その場が教えてくれました。その後、その場は、名古屋の同朋大学の学生さんや、お寺の奥さん方のグループ、などの支援で5月中ごろまで継続されました。

その活動が終わって数ヶ月経ち、自分の中で地震が過ぎたものになりにかかった時、突然、秋田氏から初めての電話があったのです。自己紹介の後、「神戸の地震のボランティアに関わったお坊さん達に対談してもらって、それをお寺の教化雑誌に載せたいのです」という依頼を受けました。もちろん私に異存のあるうはすがなく承諾しました。「会ったこともない僕の活動を、よく知っておられたな、どうやって電話など調べたんやろ」と

というのが私の偽らぬ思いでした。

対談は、秋田氏の司会の下、組織的な活動をされた真言宗と浄土宗の方、そして個人的な活動をされた日蓮宗の方と私の4名で行われました。その日蓮宗の方とは今も素敵なつながりがあります。また、この対談をきっかけに、その後、完成した應典院でのイベントに時々パネラーとして参加させていただくなどして、ご縁が深まってきました。特に数年前からは、私が仲間たちとビハーラ(注3)活動を始めたことで、應典院の目指す「コミュニティビハーラ(注4)」と方向性が重なってきて、一層ご縁が深まってきています。

## 2、葬式佛教を通り越してお寺離れの時代へ

應典院という、変わった寺院が持つ意義は、それが現代日本社会に在るからこそその意義です。應典院の掲げるスローガンの一つに「檀家を持たず、お葬式をしないお寺」というものがあります。もちろんこの言葉は、「檀家も持ち、お葬式もちゃんと行う」、親寺である大蓮寺という存在があつての應典院ですから、少し割り引いて受け取らねばなりません。檀家というメンバーを支えられて、ぬくぬくと過ごし、世の中の動きに無頓着で、通り一遍のお葬式や、法事を済ませて事たれりとしている「多くの寺院に対し、またそんな寺院を見捨てつつある現代日本社

会に対する問題提起としてのスローガンと言えましよう。

ところが、そのように長い間、「葬式佛教」と揶揄されてきた既存佛教寺院ですが、今や時代は、はるかに進み、実は葬式さえからも既存佛教寺院は排除されつつあるのです。

現代日本を象徴する「東京」という町では、最近では「直葬」というものが増えつつあるそうです。「直葬」とは、亡くなられた病院から直接、火葬場に運び、そこで24時間安置して、すぐに火葬することです。時には火葬の前後に短い読経を僧侶に頼まれる方がおられるそうですが、とても「お葬式」と呼べるような「佛事」ではなくなっています。宗教者を呼ばない「お別れ会」も増え、お墓を持たない「自然葬」や「宇宙葬」まで始まっています。また従来通り、僧侶に来てもらうお葬式でも、その僧侶が葬儀社の社員であることが出てきたそうです。さぞや、見栄えがよく、声のよい、お勤めもうまい方が勤められ、重厚なパフォーマンスで、儀式が盛り上げられるのだろうと思われまます。また一方、マンション住まいで「何宗の葬儀でもやります」というお坊さんまでおられるのです。

このようなお寺離れは、実は他人事ではありません。何を隠そう伝統ある宗教都市、大阪で住職を務める、この私の限られた経験の中でも、そのようなことが増えてきているのです。情けない住職の愚痴を聞いてください。

大阪の古い地域では、月参りという習慣があり、お坊さんがある日、Aさんのデイサービスの日と月参りとが重なってしまつて、Aさんは「お参りをしたいから休む」、Bさんは「行かなあかん」と言い争いをしておられました。そこで横から私が「ご本人のお望みだから休まれたら」と申し上げたのですが、Bさんは「休んだらあかん」と、そしてさらに言葉をついで「死んだ者より生きてる者が大事や」と言われたのです。私にはとても残念な言葉でしたが、この方にとって、僧侶のお参りは「死んだ親父のためで、生きているおふくろには関係がない、デイサービスの方が意味がある」という事なのです。

### 3、泥濘に咲く蓮華・應典院から見る佛事

現代日本社会において、「宗教」と呼ばれているものは何かというと、「病気が治る」とか「物事がうまくいくように」とか、人間の欲望を満たすための手段であると思われると思います。そんなもので願いが叶うわけがないのに、叶うかのような幻想を振りまき、我執を掻き立て、欲望を増長させる、まさに詐欺、呪(まじない)、占いの類の似非が、宗教だと思われています。一方、そんなものは迷信だと言いつつてしまう人も現代では多くおられますが、その方々の多くはまた、自分の知識、分別、理性にのみ立脚して、そう判断しているだけで、「佛教もまた、その類のものであろう」と一顧だにしません。

檀家(門徒)の佛壇に毎月1、2度お参りをして、15分ほどの読経と15分ほどのおしゃべりをして回るのですが、そういうお付き合いの場で起きた残念な出来事を二例、ご紹介します。

10数年、月参りをして頂いているあるお家があり、おじいちゃんが入院されて、もうそうは長くはないという状況になっておられました。その時、娘さんから「もうお寺とのお縁を終わりたい」と電話があつたのです。「10数年のお付き合いが、犬こころでも捨てるようにお電話だけですか、残念です」と申し上げると、後日お寺まで来られて再度「もう止めます」と、そこでゆっくりお話をさせてもらったのですが、「両親がやっていただけで、私はお寺なんか嫌いで全くお付き合いする気がありません。信仰の自由なんだからいいでしょう」と頑なです。そこで「分かりました。貴女が無宗教(正確には無宗派)を選ばれることは、残念なことだけれど、如何ともできません。でもお父さんのいざというとき、どうなさるのですか、ご本人が望んでおられるように、して差し上げるべきではないですか」と申しあげると、少し笑みを浮かべながら「もう父は話もできないし、その時はもう亡くなっているのだから、無宗教でお葬儀屋に頼みます」と言われたのです。

もう一例は、もっと長いお付き合いのある家のことです。おばあさん(以下A)が一人でお住まいで、60歳くらいの息子さん(以下B)が、時々買物などのお世話にいられていました。

この「死んだらしまい」や、極端な場合は「人間死んだら」ミになる」という発想が、こういつた寺離れの実態だと思えますが、先の方々は二重の誤解をされていると、私は思うのです。なるほど、僧侶のお参りは亡くなった方々の為という形を取ってはいませんが、それが、生きている者の、気持ちの落ち着きや安らぎになっていることに気付いておられません。またより根本的に「佛事は生きてる者のためである」ことを全くご存知ないのです。そう言うと「自己満足の為ですか」と思われるかもしれません、そうではありません。「佛事」という習慣が表現する、「亡くなった方は自分にとっての佛である」との受け止めは、まさにその方の生き様の問題なのです。簡単に言うなら「いつまでも自分にとっての先生、道しるべになってくださる方だ」という受け止めです。

先ほど例にあげたBさんは、その数カ月後、いよいよAさんの体調が悪くなると、さっさと老人ホームに入れてしまわれました。そして近所の奥さんが「お見舞いにいきたい」と言つて、「おはちゃん止め」といって、里心がつくから」と言われて、Aさんの借家や佛壇の処分を進められたのです。まさに佛事はその方の生き様の問題なのです。

本物を食べて、なおかつ「要らない」と言われるのなら納得もいくのですが、偽物ばかりを舐めて「こんなものは要らない」と思われているのが残念でならないのです。世間の現状を非難

#### 4、いのちのお世話の主体「ビハラーとNPO

して、ながながと述べているわけではありません。いかに私達、既存佛教寺院、教団が手をこまぬいてきたのかということ、自己批判して申し上げているのです。

このような現代日本社会に在るからこそ、應典院の意義があります。佛教に願いを持つ多くの方々にとって、縷々述べたような現代社会の様相は残念な限りのことです。ところが既存佛教寺院の多くは、その有り様に積極的に応えているようには見えません。聞いてもすぐには意味の取れない外国語（漢文）で書かれた経典をただ読むだけ、話をすれば、難解な佛教用語を用いるだけか、はたまた単なる世間話。これでは、「本来、佛教、佛事、寺院は生きている者の問題に應えるためにある」ことが表現できるわけがありません。

特に今、佛教寺院、教団は、人々の問題に細々としか応えられていないのです。これには明治維新以来の廃佛毀釈、国家社会主義。そして特に戦後の、日本政府の社会主義的宗教政策のためである部分も相当大きいのですが、それで寺院や教団の責任が免じられるわけではありません。

そんな屍累々の砂漠に一つのオアシスが現れたということなのでしょう。應典院は「今生きている方々の願いに応える佛教」の一つの表現なのです。それこそが、その存在意義です。應典院は、まさに泥濘に咲く一輪の蓮華なのです。

これは、誠に本来的な宗教活動ですが、日本でも古くは、聖徳太子創建の四天王寺の四箇院（敬田院・非田院・施薬院・療病院）に始まり、明治までは、まさにこのような活動をお寺が行っていたのです。應典院が、近い将来の目標に「ミニユニビハラ」を掲げていることは、まさに本来の寺院の役割を回復することでもあります。

一方、このチャブレン活動を行うために、ハワイではキリスト教会系のNPOが病院と契約し、NPOが宗教者の養成や派遣を行っています。現在日本でも、いろんなNPOが生まれています。その中で、社会福祉や環境保護、人権や平和といった、「いのち」に関わるNPOの運動、またそれらに関わっておられる、特に若い方々の動きを見ますと、私には「これは現代の、形を変えた宗教運動だな」と思えるのです。

現代日本で「宗教」という言葉ほど卑しめられた言葉はありません。種々の「カルト」が「宗教」と混同される日本にあって、宗教は「あんまり深入りしないでね」としか言われない存在になってしまっています。そんな中で若い方々は、その健康な宗教心の発露を、「いのち」に関わるNPOの活動で発揮しておられるように思えます。

もちろん、演劇や音楽といった活動が、どのような形で広い意味での「佛教表現」になっているのかといった吟味は、應典院の責務として、走り続けながら、し続けねばならないこと

「今生きている方々の願いに應える佛教」のひとつの形として、20年前にビハラーという運動が提唱され、ここ数年で新たな展開が始まっています。私も仲間達と共に数年前から関わっているのですが、当初は、正直言って「どうして死にかけてから宗教者なんや」という疑問がありました。

しかし数年前、ハワイの病院に見学に行き、そこで、チャブレンと呼ばれる、病院で働く宗教者に会いました。その病院では、患者のケアに、医者と看護婦とチャブレンとソーシャルワーカーの4者が同等な立場でチームを組んで関わります。医者は病気の治療を、看護婦は日常の看護を、ソーシャルワーカーは患者の金銭的な面とか仕事の相談とか、そして、チャブレンはスピリチュアルな面から支えます。時には医者や看護婦のスピリチュアルなケアまでするのです。「これこそ本質だ」と感じました。日常から宗教者がお世話をし、その延長に、もちろん亡くなる時や亡くなってからのお世話もあるのです。

その病院にはキリスト教スタイルの礼拝室がありました。が、ステンドグラスの扉を開けると、そこから金色の阿弥陀如来が現れるのです。ハワイですから、多くおられる佛教者に応えて、佛教チャブレンもおられました。

しょうが、そのようなNPOと関わることを、活動の基本に置いている應典院はまさに現代の寺院ですし、近い将来の佛教寺院の在り方を先駆的に示していると言えましょう。いやむしろ寺院こそ、元祖「NPO」ではなかったでしょうか。国策ではなく、利益を目的とせず、佛の慈悲と智慧とを「公」に表現する組織だったのです。このような佛教寺院である應典院と関わる若い方々にとって、それが将来、芽をふくである「種子」になっていることは間違いないことだと考えますし、それこそが應典院が現代日本に存在する意味と言えましょう。

#### 【注】

- (1) 「スピリチュアル」魂の救済、全人的といった意味。適当な訳語がないが、単なる精神的でもなく、オカルトでもない。
- (2) 「坊主バー」筆者が主宰する、お坊さんが話し合い手として座っているバー。大阪のミナミ、東京の四谷、中野、にある。現代の辻説法の間
- (3) 「ビハラー」85年「佛教ホスピス」に替わる言葉として用いだされた、昔のインドで「僧院・休養の場」を表す言葉。現在はその意味が広がり、医療、福祉、さらには災害支援のボランティアなど、佛教精神に基づいて、人の生老病死に寄り添う、社会活動・奉仕活動全般を指す言葉となっている。
- (4) 「ミニユニビハラ」地域の共同性を復活させ、人のつながりの中でお互いがお互いの生老病死を支え合うこと。

「ひと」と「場」の交差点……

# 應典院にしき

呼吸するお寺・應典院の、11月〜1月の活動記録です。  
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

## 11月

- 2日・コモンズフェスタアフター企画」対話が生み出す創造都市」開催。特別ゲストは平田オリザさん。本堂ホールでのトークも、交流広場での懇親会も大盛況。
- 3日・應典院CC第8弾「映画が地域を見つめる、映画で地域を見据える」開催。鎌仲ひとみ監督の新作「ハケ所村ラフソディ」制作を追った記録および「ヒバクシャ」鑑賞とトーク。
- 5日・上町台地からまちを考える会のフォーラムに就職と主幹が参加。空堀の長屋「練」にて。
- 8日・第11回アーツと仕事研究会が開催。ゲストは、PLANET StudyPlusOneの富岡邦彦さん。
- 12日・毎年恒例、子ども七五三法儀。
- 16日・築港の新拠点に携わるスタッフとの懇親会。
- 21日・岩淵拓郎さんを囲みコモンズフェスタ座談会。第12回アーツと仕事研究会。ゲストはうえまち貧自転車・西代官山クラブ小田切聡さん。
- 24日・東京での市民セクター全国会議にて、主幹が應典院の実践を事例発表。「公」のあり方について議論する分科会にて。

## 12月

- 1日・ジャングル・インディペンデントシアター劇場プロデューサーの相内唯史さんが来訪。ミナミの劇場事情等について、主幹と主務（劇場担当）の城田と懇談。
- 3日・奈良の「たんぼぼの家」による「アートで極楽」と題した企画の一つ、cocoonによるアートで極楽ワークショップを観賞。住職と主幹が一心寺にて。5日・奈良の「たんぼぼの家」の「メセナ大賞」受賞記念式典に住職と主幹が参加。住職は挨拶も。
- 7日・協力事業・アートで極楽フォーラム「都市と祝祭空間」本堂ホールで開催。主幹が登壇。
- 8日・第47回寺子屋トーク「いのちのエンジャー〜地球と暮らす新しいライフデザイン」開催。同志社大学今里滋さん、農家の正木高志さん、映画監督鎌仲ひとみさんが地球環境に負荷のかけられない生活について語る。
- 12日・アトリノースセンターby women（築港ARCC）がオープン。事業関係者を招いた開所式の後、piaNPO屋上に設置されたゲルにて交流会。
- 13日・造形作家井上廣予さんと3

- 月の大阪・アート・カレイドスコープの打合せ。小僧インターン日高主権「フツカカフェ」開催、テーマは「四諦」。
- 15日・隼石少年トースター山内直哉さんが来訪。次回のspace x dramaについてなど、主幹と主務（劇場担当）の城田と懇談。
- 19日・第13回アーツと仕事研究会。ゲストはP.O.aid甲斐賢治さん。
- 21日・住職ブレゼントツ應典院大忘年会。日頃お世話になっている劇創ト社、インターンを含め総勢20名。
- 22日・同志社大学大学院総合政策科学研究科「アートのマネジメントの理論と実践」の講義にて城田主務が話題提供。18時25分からの講義は、22時過ぎの懇親会終了まで、白熱した議論に。
- 24日・新たに策定される大阪市の文化政策に対する市民側の意見をまとめるよう「嘆願書」をまとめていくための会議に就職と

- 主幹が参加。「大阪にアーツカウンシル（文化評議会）」を、主な主張にとりまとめる。
- 26日・自分感謝祭。1年をふりかえる。第2部終了後は交流会。應典院立ち上げ初期のおなじみさんも多数参加。
- 27日・年賀状を添えたサリュウ50号発送作業。小僧インターンと。夜には築港ARCCスタッフオーナートーク第一弾。
- 28日・應典院、築港ARCC仕事納め。大掃除。第14回アーツと仕事研究会。ゲストは音楽家の野村誠さん。
- 31日・除夜の鐘。お手伝いは10時集合という意味を勘違いした主幹と主務が應典院を大掃除。
- 5日・應典院2007年仕事はじめ。大蓮寺本堂において秋田光茂先代による法話。その後は大蓮寺関連のパドマ幼稚園・創教出版職員を含め総勢40名による

## 1月

- 互社会にスタッフ揃って参加。
- 7日・應典院メンテナンステー。
- 9日・築港ARCC2007年仕事はじめ。
- 11日・関西ごども文化協会の会議に主幹が参加。子育て支援の方策について意見交換。
- 13日・関西エンゼルメイク研究会の鎌田智宏さんと京都府看護連盟で講演。10月の取り組み報告。
- 17日・阪神淡路大震災13回忌法要。次年度S×Dミーティング。
- 18日・宗教学者田宗鳳さん来山。朝日新聞の取材で、若者と宗教芸術やスピリチュアリティをテーマに住職と対談。
- 19日・應典院協力事業「アフガン子ども教育・母親自立支援チャリティ絨毯展」開催。絨毯の売上げで中古車1台をアフガンへ贈ることを目指す。21日まで。
- 23日・産経新聞より「終の棲家プロジェクト」取材。サンフランシスコ大学のジョン・ネルソンさん、釈徹宗さん、映画「あか
- よる「アートで極楽」と題した企画の一つ、cocoonによるアートで極楽ワークショップを観賞。住職と主幹が一心寺にて。5日・奈良の「たんぼぼの家」の「メセナ大賞」受賞記念式典に住職と主幹が参加。住職は挨拶も。
- 7日・協力事業・アートで極楽フォーラム「都市と祝祭空間」本堂ホールで開催。主幹が登壇。
- 8日・第47回寺子屋トーク「いのちのエンジャー〜地球と暮らす新しいライフデザイン」開催。同志社大学今里滋さん、農家の正木高志さん、映画監督鎌仲ひとみさんが地球環境に負荷のかけられない生活について語る。
- 12日・アトリノースセンターby women（築港ARCC）がオープン。事業関係者を招いた開所式の後、piaNPO屋上に設置されたゲルにて交流会。
- 13日・造形作家井上廣予さんと3
- 27日・「いしかわ地域づくり円陣2006」にて主幹が講演。小松市民交流プラザ「ザ・マツ」で、「域内交流の拠点づくりとその運営」と題した分科会にて、青海康男さん（いしかわ市民活動ネットワークキングセンター）と内山博史さん（七尾まちづくりセンター）と。
- 30日・築港ARCC新年会。
- 31日・本堂舞台照明メンテナン

應典院寺町倶楽部  
主催・共催の催し  
ラインナップ

いのちと出会う会

第66回 3月15日(木)

「引きこもりから楽しみの人生へ」

話題提供者：木戸 啓介さん

(インターネットtv-Woo.jp番組パーソナリティー)  
他人を否定し、父親の死さえ冷淡に見ていた時に、父や母、そして人生への感謝の気づきがある日突然、襲ってきた。誰もが迎える人生の奇跡を感じてもらいたいと話されます。

第67回 4月19日(木)

「死別経験を生かして」

話題提供者：田上 貞夫さん

(「大阪まわりの会」(遺族の会)運営委員)  
奥さんを乳がんで亡くし、その後、認知症となった義母の想像を絶する介護、そして2人の若いお嬢さんの世話。今は一人暮らしで人の助けにとボランティア活動に精を出されています。

※いずれも第3木曜日18:30~20:30まで  
参加費 寺町倶楽部会員700円(一般1,000円)

共催事業(モモの家<MOMO>)

「衣と食から探るサスティナブル・ライフ」

～持続可能な暮らしの実践を求めて～

- 日時 3月31日(土) 10:30~17:45
- 場所 應典院本堂ホール
- 内容 映画上映とシンポジウム  
映画：「遺伝子組み換えで広がる緑の沙漠 食の未来」  
シンポ：今里滋さん、鯛田藤子さん、きのりえさん、冨田貴史さん
- 料金 シンポと映画2300円・映画のみ1300円(前席は30円増)

協力事業(上町台地「春の陣」参加事業)

「いのちの"ガイアログ"] 映し出されるアフリカの台地

- 日時 4月1日(日) 15:00~17:00
- 場所 應典院本堂ホール
- 内容 小川日出輝氏(映像作家)による映像作品上映と秋田光彦氏職とのトーク
- 料金 1,000円(小川氏の意匠に賛同しスリランカ等の学校建設の資金に寄附)

築港 ARC 月例トークサロン

ARC トークコンピレーション

関西でとりわけ先進的なプロジェクト、スペース運営を手がけるコーディネーター、アーティスト、またはアートを用いて多様な社会領域に関わる実践者をゲストに招いたトークサロンを実施しています。是非お越しください!

- 場所 築港 ARC (piaNPO・308号室)
- 料金 1000円(資料・お茶代)

● #001 3月17日(土) 18:00~  
「カフェの領域 ~異分野から実践するカフェプロジェクト~」

若者の就労支援から始まり「新しい働き方を提案する場所」として運営されている高槻カフェ・コモンズ。主人自らが演劇人であり、様々なジャンルのアーティストがイベントを行ったり情報を交換する場所となっている谷町カフェバー・ポコペン。異なる社会領域で活動する二人が、「カフェ」という共通のアウトプットを実践している背景について、お話を伺う。

ゲスト：福井哲也(カフェ・コモンズ マネージャー/日本スローワーク協会 理事)・益山貴司(カフェバー・ポコペン 店主/劇団子供巨人 主宰)

【今後の予定】

- #002 4月21日(土) 18:00  
「“家”について考えてみる」  
ゲスト：佐藤武紀(アーティスト/出張マイハウスプロジェクト)・小川恭平(キョートット出版/ex.居候ライフ)
- #003 5月19日(土)  
「思考する古本屋」
- #004 6月16日(土)  
「レコード史から読み解く関西オルタナティブロックシーン考察」

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部  
FAX 06-6770-3147  
メール info@outenin.com

應典院寺町倶楽部の  
ニュースレター

サリュ  
Vol.51

<次号 52号は…>

2007年5月発行予定

【特集】：  
10  
1997 4  
10 …  
10

- 発行日 2007年2月28日
- 発行人 秋田 光彦
- 編集人 山口 洋典
- スタッフ 池野 亮光  
大塚 郁子  
城田 邦生  
朝田 亘
- 発行所 應典院寺町倶楽部  
〒543-0076  
大阪市天王寺区下寺町1-1-27  
TEL 06-6771-7641  
FAX 06-6770-3147  
E-mail info@outenin.com  
URL http://www.outenin.com

編集後記

今年「はコモンズどうするの?」とお声をいただいたこの2年。目覚めたら、新しいできごとにあふれていました。普段は会場利用でお会いする人たちが企画をカタチにしたり、おつきあいが始まって、これから深まる予感の人たちとの出会いもありました。なにより、昔馴染みの方々との再会は格別でした。いったん冷ましたら煮物の味はよくしみこんでおいしいのですが、そんな美味いコモンズが仕上がっていたとすれば幸いです。(大塚)

今号は、コモンズ特集。自分自身、應典院スタッフとしても、また、一参加者としても、大変に密度の濃い一月間でした。應典院のこれまでの活動を詰め込むだけ詰め込んだ一月間。特集の中でも触れていますが、私は、この一月はカオス(混沌)そのものだと思います。が、カオスだったからこそ、新たな萌芽があったように思うのです。ここで、芽生えた新たな試みをじっくりとビルドアップしていきたいと考えています。(城田)

様々な社会領域で活動するNPOの集積センター“piaNPO”。芸術分野のスペースを、このpiaNPOに於いて運営するということの意味。この2ヶ月半の活動の中で、殊に考えるようになった事項です。先日、2月28日(水)に行われたスタッフオープンミーティングは、芸術が社会に関わってゆくことについて芸術分野以外の方からの貴重な意見を伺える良い機会となりました。まずはこのような開かれた機会を継続して設けることにより、スタッフ自らが確信を持って芸術を多分野に繋げていく契機にしたいと思います。(朝田)

実はこのサリュ52号は大塚郁子さんの退職記念の「卒業制作」です。お疲れさま、そしてありがとうございました。「エッ!」と驚かれる方も多いのではないのでしょうか?新しい季節を新しい体制で迎えることとなりますが、「大塚さんがいたときには…」と言われないう、スタッフ一同、気を引き締めて参ります。(山口)

# 林の中で ひとり 楽しみ

ひとり坐し、  
ひとり臥し、  
ひとり歩み、  
なおざりになることなく、  
わが身をととのえて、  
林のなかでひとり楽しみ。

「法句経」より

應典院寺町倶楽部の  
ニュースレター

## サリュ

Vol.51

Top Interview

人間とは何か。  
根源的なものにふれるアートの世界

1

特集：アートとNPO  
寺院空間発、創意と技の再創造。

4

「モンズフェスタ2010」  
参加企画大全集

5

スタッフ座談会

10

「モンズフェスタ」に寄せて

14

「モンズフェスタ2010」参加  
應典院おなじみ劇団紹介

16

アート情報誌の共有と連携のデザイン  
築港ARCの展望

18

築港ARCスタッフ紹介

23

應典院解題

今生きている方の願いに  
応えるお寺・應典院

24

「ひと」と「場」の交差点  
應典院につき

30